

レトリックと共和政（二）

大 森 秀 臣

目次

- 一 はじめに
- 二 キケロー——自由で平和な共和政における賛否両論の使い分け（以上前号）
- 三 サッルスティウス——外敵の脅威に代わって内紛を常軌化する言論手段（以下本号）
- 四 リーウィウス——善き意思によって共和政に調和をもたらす技術？
- 五 タキトゥス（以下予定）
- 六 結びに代えて

三 サッルスティウス——外敵の脅威に代わって内紛を常軌化する言論手段

ガイウス・サッルスティウス・クリスプス (Gaius Sallustius Crispus) は、キケローとほぼ同時代のローマに生きた政治家であり歴史家である。ローマ内戦では、民衆派のカエサル側について戦争に従事し、カエサルが殺害された後は隠退して、著作活動に従事した。大部の『歴史』が主著になるがほとんどが散逸、『カティリーナ戦記』と『ユグルタ戦記』がほぼそのまま残されている。本章では主にこれら二冊の書物を対象に、ベネデット・フォントーナ (Benedetto Fontana) やダニエル・ケイバスト (Daniel J. Kapust) の読解に依拠しながら、⁽¹⁾ サッルスティウスの「レトリックと共和政との関係」観について検討したい。

カルターゴー征服以前のローマ結束の要因——外敵の脅威

サルスステイウスは、キケローとは異なるローマ史観をもっていたようである。サルスステイウスは、ローマは建国期から当代にいたるまで、対立と秩序との微妙な均衡を取り続けてきた、と捉えていたように思われる。彼によれば、ローマの黄金期は、キケローの理解とは異なり、カルターゴー征服の後にあつたわけではない。ローマではカルターゴー征服の後に平和が訪れたというより、その前だけでなく、その後も同じように対立と秩序との均衡状態が続いていた⁽²⁾のである。だがレトリックと共和政との関係に着目すれば、サルスステイウスのローマ史観には、カルターゴー征服の前と後との間に大きな断絶があるように見える。

かつてローマは、地中海の覇権を争っていたカルターゴーから何度もその安全を脅かされていた。ローマは、地中海沿岸の大国でありもう一つの雄でありながら、自国領土にまで踏み込まれ、將軍ハンニバルらによって大敗を喫した。この時代ローマは対外的な意味では極めて危機的な状況にあつた。だが他方で、対内的には分裂の状況から免れていた。元来ローマ人は、平民と貴族とによって身分的に区別され、常に階級対立、政治闘争、内乱の危機に晒されていた。しかし彼らは、たとえ階級や利害を異にしても、カルターゴーという共通の外敵を迎えては互いに結束せざるを得ず、それによってかううじて融和と秩序を保つことができたのである。サルスステイウスは、ケイパストによれば、共和政ローマが平民と貴族との間で分裂せず、何とか結束を維持することができていたのは、外敵の脅威 (*metus hostilis*) があつたからだと考えていた、という。ローマは、この外敵の脅威に支配されている期間、対外的に危機状態にあつても対内的に結束していた。ローマは「第二次と第三次のポエニ戦争の間に」むしろその黄金期を迎えていたのであり、その期間に「最高の道徳に従い最高の調和をもつてうまくいった」(*Salust. l. 9*)。そして「カルターゴー破壊の以前に、ローマの民衆と元老院は、相争うことなく、ともに公共体を平和にまた穏やかに統治していた」のであり、「外敵の脅威が国をよき性質のまま保つていた (*metus hostilis in bonis*

artibus civitatem retinebat」(Sal. Jug. 41. 2) であろうのである⁽³⁾。

むしろ問題はカルターゴを打倒した後に起こった。ローマ人には宿敵カルターゴを征服さえすれば、ローマに平和と安定がもたらされるかのように見えた。だがサルスティウスは、まさにこの時点にローマの危機を見出したのである。ケイパストによれば、カルターゴの脅威が取り除かれたことは、サルスティウスにとって歓迎されるべき事実ではなく、ローマ市民を階級や利害に関係なく一致団結させてきた共通の基盤が取り除かれることを意味した。実際にローマ市民はその後、公共体の福祉や共通善を見失ってしまい、墮落し腐敗するようになってしまった、というのである⁽⁴⁾。カルターゴが破壊されローマがその脅威から解放されたとき、欲望や傲慢といった悪徳がはびこった。「不和、貪欲、野心は、『繁栄の時代』にはびこった悪徳であって、カルターゴが破壊された後、ローマが平和であったときに最大に達したのである」⁽⁵⁾。かつてローマ市民を結びつけてきた紐帯は程なく解かれ、残されたのは階級間の対立、野心家たちの闘争、政治的利害を巡る内輪もめであった。外敵カルターゴを克服したローマにとって、結局、不和と対立は国家の間から国家の内部に移されたに過ぎなかった。それまで内部対立を制御していた共通の外敵の脅威がなくなり、国内に潜伏していた階級と利害の対立が顕在化したからだ、というのである。

レトリックは外敵の脅威に代わる手段

ただここで注意すべきなのは、サルスティウスは、ローマ共和政において国内の対立や闘争が不可避であったことを問題視したわけではなかった点である。ケイパストによれば、サルスティウスにとって内紛そのものは害悪ではなかった、という。むしろ内紛は、ローマ人が享受していた様々な自由の帰結であり、ローマの発展を促す生産的な競争として捉えられていた。顧みてみれば、共和政が確立される以前から、ローマは数多くの不和を抱え、

ときに騒動や緊張に見舞われてきた。カルターゴのような外敵の脅威でさえ、ローマ内部の対立と緊張を完全に解消したわけではなかった。外敵の脅威は、単なる歴史的偶然によって、ローマを一時的に結束させたに過ぎなかった。だがもしローマに階級間の対立や権力をめぐる闘争がなかったとすれば、当時ほどの繁栄を謳歌することはなかったであろう。問題は、対立や係争が正しい手続のもとで梓づけられずに、ローマに壊滅的な結果を招いてしまうことであつた。ローマ内部にくすぶる対立の火は、徳と結びつき、正しい手続の下に収められるならば、むしろ歓迎されていたとさえ言える。「サルステイウスにとって緊張は、正しく構造化されている限りで生産的であり得たのであり、自由な政治共同体において重要な地位を占めていたと言えるかもしれない」⁽⁶⁾のである。

このようにサルステイウスにおいて対立が歓迎されているならば、トマス・ホッブズ (Thomas Hobbes) のサルステイウス解釈は必ずしも正確ではないことになるだろう。ホッブズは、ギリシャやラテンの著作者たちの書物を読む人々はみな「動乱をこのみ、かれらの主権者たちの諸行為を好き勝手に制御する」⁽⁷⁾習慣をもつと非難をしているが、サルステイウスだけは例外だとしている。実際ホッブズは、ローマに不和を起こしたカティリーナについて「雄弁さは十分に備え持っていたが知恵には乏しかった」として、サルステイウスが「雄弁の方は騒擾を起こすために生まれたようなこの男に必要なものとして帰するが、知恵は平和を命じるものだからというので、それがカティリーナにあつたとは認めない」⁽⁸⁾ことを指摘して、騒乱をもたらす雄弁ではなく平和をもたらす知恵を選好したことを理由に、サルステイウスをプラトーン以来の反レトリックの論者として評価しているのである。⁽⁹⁾確かに外敵の脅威を絶対主義的国家の登場と成立の条件——「万人の万人に対する闘争」が横行する自然状態からの脱出——と見なしている点でも、サルステイウスをホッブズ流の社会契約論に引きつけて解釈することは不可能ではないかもしれない。だがケイパストによれば、彼はホッブズ式の自然状態を描いた原ホッブズ主義者 (proto-Hobbesian) ではない、⁽¹⁰⁾という。むしろ敵対的共和主義 (antagonistic republicanism) と呼ぶことのできる

著作群を残した歴史家として考えられる、と。サッルスティウスは、確かにカルターゴーのような外敵の脅威によってローマ人たちの対立と緊張が緩められた史実を指摘してはいるが、恐怖が対立の解消を保障すると考えていたわけではなかった⁽¹⁰⁾。サッルスティウスは、ホップズの解釈に反して、外敵の脅威があるからレトリックが不要だと考えたのではなく、むしろ外敵の脅威がなくなつたまさにその瞬間にレトリックが必要だと考えたのである。

サッルスティウスが描いたローマの次の課題は、カルターゴーが崩壊した後に顕在化してきた平民と貴族との間の不和をどのように融和させるかにあった。地中海の覇権を握ったローマには、もはや自分たちを脅かす強力な外敵は当面はおらず、自分たちを結束させる共通の基盤は失われた。ケイバストによれば、彼はまさにこの文脈において、レトリックの役割を見出した、という。すなわち外敵^{メトッス・ホステリス}の脅威に代わる、説得による融和の手段としてのレトリックである。ローマにおいて対立と緊張が不可避で常態的であるとするならば、取り組むべき課題は、もはや国外に目を向けることなく、言論の力によって、聴衆を説得し、自分の味方につけることによって、対立する当事者双方のエネルギーをうまく常軌に乗せることである。対立を橋渡しする（channel）こと、そして正しい方向に向ける（rightly direct）こと、これがサッルスティウスのレトリック理解の眼目であった、と。⁽¹¹⁾

『カティリーナ戦記』におけるレトリックの役割

サッルスティウスは『カティリーナ戦記』において、このレトリック行使の実例^{エクスンプラ}として、ガイウス・ユリウス・カエサルと小カトーとの間の演説の対決を描いている。両者の弁論は、ローマに反旗を翻したカティリーナと彼の共犯者に対する処遇をめぐる、とくに本件の裁判では自白をした共犯者に死刑を下すべきかどうかを元老院議員たちに問いかけたものであった。両者とも当時名を馳せた第一級の雄弁家であり、事態は公共体の行く末を決める重大かつ喫緊の状況にあった。両者はこのような緊迫した議場にて、正面から対立する主張を繰り広げたの

である。

一方のカエサルは、尊厳 (*dignitas*) の価値に訴えた。怒りや欲望に駆られて、安易に暴力をもって解決に当たるべきではない。ここで共犯者プブリウス・レントウルスらに死刑判決を下すことは拙速であつて、悪しき前例として後に諸君ら元老院議員たちの尊デイレグニタース厳を損なうことになる。ローマ人たちがカルターゴーとの戦争の時代に示してきた態度と同じように、ローマの元老院議員に相応しい尊デイレグニタース厳をもつて事に当たるべきだ、と言うのである。少し引用が長くなるが、サッルスティウスが記したカエサル演説を引用しておこう。

バトレス・コンスクリプティ
元老院議員諸君、確実でない事柄について考慮する者は皆、憎悪や友誼や憤怒、憐憫からも自由でなければならぬ。それら (の感情) が妨げる場合、精神が真実を予見するのは容易でなく、また、皆の内、誰一人として、 (個人的な) 欲望と (公的な) 利益とは同時に従わないものである。君たちが天分に意を向ければ健全である。もし欲望が (君たちを) 捕らえれば、それに支配され、精神は全く健全ではなくなる…また全てのポエニ戦争において、カルターゴー人たちは平時にも休戦時にも、しばしば多くの不敬な悪行を行ったけれども、 (ローマ人たち) 自身は、好機を通じて、そのようなことを決して行わなかった。法によって彼ら (カルターゴー人たち) に対して行えること (復讐) よりも、彼ら (ローマ人たち) は、むしろ自らに相応しいこと [*quid se dignum foret*] を求めていたのである。元老院議員諸君、また君たちによつても、以下のことが考慮されるべきである。 (即ち)、君たちの威厳よりも、プブリウス・レントウルスと他の者たちの犯罪の方が、君たちに影響しないこと、また名声によりも君たちの怒りに君たちが拘泥しないこと (である)。 *Sal. Cat. 51. 17* [一〇四—〇九。亀甲括弧は大森、丸括弧は翻訳者による。]

対するカトーは、誠実 (*honestas*) ではなく安全 (*trita*) に訴えた。目下の状況は国家の存亡のかかる重大かつ喫緊の事態である。状況は切迫しており、もはや躊躇する暇はない。もし対応が遅れば、公共体の運命ばかりか、君たち自身の利益までも失うことになる。時を待たず共犯者に死を与えねばならない。サルステイウスによれば、カトーは以下のように彼の同僚である他の元老院議員たちを叱責した、という。

：しかし、我々は彼らに何を決定すべきか、ということ論じるよりも、彼らを警戒するように、状況は教えず論じているのである……もしも、どのような種類のものであれ、君たちが好む（邸宅などの）それらのものを確保したいと、君たちの歓楽に閑暇を供したいと望むのであれば、いよいよ目覚めて国事に邁進せよ。貢納物や諸同盟市に対する不正は重要ではない。我々の自由と生命が、窮地にあるのである [Non agitur de vectigalibus neque de sociorum iniuriis, libertas et anima nostra in dubio est] …彼らに、我々の血を施与させないように、また少数の罪人たち（の命）を惜しむ間に、全ての善人たちを滅ぼさせないようにせよ……しかし、我々は全方向から取り囲まれている。カティリーナは、軍隊と共に喉もとに迫っている。市壁内にも、また首都の内奥にも別の敵たちがあり、誰一人として、密かに準備したり協議したりできない。そのため、ますます急がなければならないのである。Sal. Cat. 52.3-35 [一一一—一七。亀甲括弧は大森、丸括弧は翻訳者による。]

このようにサルステイウスが描くカエサルとカトーとの間の論争は、真つ向から対立するものであった。
 デイグニタース
 尊 厳を説くカエサルは共謀者たちの減刑を説き、安全を要求するカトーは彼らの死刑を求めた。彼らの間には一点の妥協の余地もないように見える。だが重要なのは、彼らはどちらも物理的な暴力や威圧を用いているわけではない、ということである。彼らが用いているのは理性的な言葉と演説であって、どちらの主張が聴衆たる元老

院議員たちを説得することができると競い合っている。結局、史実としてはカトーの演説が成功する顛末になるのだが、カエサルもレトリックを駆使して言葉の力で説得に努めた点ではカトーと異なるところはなかった。この論争は、内紛のエネルギーが、常軌を逸して暴発することなく、レトリックによって適切に回路を与えられた事件であったのである⁽¹²⁾。

— サッルスティウスは、カエサルとカトーとの間の論争に焦点を当てることによって、カルターゴーのような外敵の脅威がなくなった後のローマに争いの筋道・回路を与えるレトリックの役割を浮き彫りにしている。両者の論争は、対立的な局面ではなく、むしろその対立を超えた次元を照らし出すために描かれたと言えるかもしれない。ケイパストによれば、サッルスティウスは、カエサルとカトーとの関係に対立的ではなく、むしろ補完的に捉えたのだ、という⁽¹³⁾。確かに両者とも性格は対極的とも言えるほどに異なっていたが、どちらも各々の徳によって——カエサルは懇意・氣立て (*facilitas*) によって、カトーは一徹さ・不屈 (*constantia*) によって——栄光に浴した。サッルスティウスは、両者の性格と氣質を次のように対照的に描いている。

さて彼らは、出自、年齢、弁舌が、ほぼ同等であった。精神の偉大さは等しく、また栄光も同様であったが、各人各様 (の栄光) であった。カエサルは善行と氣前の良さによって、カトーは生活の高潔さによって、偉大であるときみなされていた。前者 (カエサル) は、温情と同情において優れているときみなされており、後者については、厳格さが威厳を加えていた。カエサルは与え、援助し、許すことで、カトーは全く贈与しないことで、栄光を手に入れた。一方には不運な者たちにとっての避難所が、他方には悪人どもにとっての破滅があった。前者 (カエサル) の懇意、後者 (カトー) の一徹さが、賞讃されていた (*Illius facilitas, huius constantia laudabatur*)。つまり、カエサルは、働いて、眠らないでいようと心に決めていた。(彼は)、友人たちの仕事に専念して、自ら

の（仕事）を顧みず、贈物に相応しいものを決して拒否しなかった。自らには、（権限の）大きな命令権と軍隊と、武徳が輝けるようになる新規の戦争とを望んでいた。他方、カトーは節制と品格とに、だがやはり、厳格さに非常に熱意があった。資産家と資産を、権謀家と権謀を競うのではなく、精力家と精神力を、節制家と貞潔を、廉潔家と禁欲を競っていた。優れた人と思われるより、（優れた人で）ありたいと望んでいた。このように、（カトーが）栄光を求めないだけ、それだけです（大きな栄光が）彼に伴っていた。Sall. Cat. 64. 1-6 [111-118. 亀甲括弧は大森、丸括弧は翻訳者による。]

顧みてみれば、ローマ建国の時代から、一見性格的に対立するかのように見える人々が、結果的にローマの繁栄に等しく貢献し、互いの欠陥を補完し合った例はあった。たとえばローマ初期の二人の王——ロームルスとヌマ・ポンピリウス——もまたそうであった。どちらも徳性とローマへの貢献の仕方はまったく異なるとしても、卓越した手腕でローマの繁栄を導いたのである。カエサルとカトーもまた、ロームルスとヌマのように、性格も手腕も異なっている、栄光と卓越への道を歩んでいた点では同じであった、⁽¹⁴⁾というのである。

『ユグルタ戦記』におけるレトリックの役割

またサッルスティスは『ユグルタ戦記』においても、ガイウス・マリウスとルキウス・コルネリウス・スッラが用いたレトリック行使の^{エッセンス}実例を挙げている。ただ『カティリーナ戦記』とは異なり、この実例は両者による直接対決の演説の場面ではない。ローマ史上有名なマリウスとスッラとの間の血で血を洗う凄惨な対立と抗争はユグルタ戦争の後の時代に起こるのであり、この著作が描く時代では、マリウスは軍隊指揮を任されヌミディアに派遣された執政官^{コンスル}であり、スッラはマリウスの部下で財務官^{クァエストル}として従軍していた。だがここでも戦争の行方を大きく

左右する両者の演説の場面と、両者のそれぞれ異なる性格が対照的に描かれており、そこからサッルスティウスのレトリック理解をうかがい知ることができるのである。

一方でマリウスの演説は、貴族たちを叱責し、戦争への意欲を鼓舞する勇ましいものであった。マリウスは、貴族出身でローマ軍の中では彼の上に当たる執政官メテッルスがなかなかヌミディアでの戦争を終結できないことに業を煮やし、自ら指揮権を得るべく急きょローマに帰国し執政官選挙に立候補して見事当選した後に、ローマ市民の前で演説を行うことになる。この演説は、彼自身がたたき上げの平民軍人であり、貴族のメテッルスによって散々立候補を諫められ除隊を渋られたとの恨みからか、貴族と平民との相違を殊更に強調し、平民出身でも軍功を挙げてきた自分を礼讃する。この演説もかなり長いものだが、関連のある箇所だけ抜き出しておきたい。

市民諸君、私のような新参者と傲慢な貴族たちとを比較してみたまえ。貴族たちは人から話を聞き、本で読むだけだが、私は実際に目で見て、自分の手で行う。貴族たちは本で学ぶだけだが、私は軍隊で学んだ。さあ諸君、言葉と行為のどちらが価値あると思われるか？…確かに、貴族たちが私に返答する気になるなら、彼らの演説はふんだんに雄弁で技巧を凝らしたものになるだろう…私は本当に何の弁論もなく傷つけられるだろうことと思う…だがもし必要なら、私は体に刻まれた傷跡の他にも、槍、軍旗、装飾具、その他の勲章を見せてやろう…私の言葉はよく練られたものではない。私はそんなことに気を配らない。徳はそれ自体で十分明らかだ…私はギリシャ語も学ばなかった。私はそんなことを学ぶことに喜びを見出さなかった。何の教えにも役立ちはないからな。だが私は公共体にとって重要なことを学んだ。敵を倒したり、必死で守ったりすることだ…これらの教訓によって、私は軍隊を鼓舞するのだ…さあ君たち、軍隊に属する年頃の者たちよ、私と一緒に懸命に国家のために尽くし、誰も他人に降りかかった災難や指揮官の傲慢に恐れを抱かないようにしよう。私は、行軍中も戦闘

中も傍らにいて、君たちと共に上官や同僚が危機に陥れば駆けつけ、どんなときにも私と君たちを同様に扱おう。
 Sal. Jug. 85. 1-50

このマリウスの演説は、洗練されているが傲慢な旧来の貴族と、無骨だが兵士たちに親身な新人とをレトリカルに対比して、貴族を揶揄し民衆に語りかけているように見える。⁽¹⁵⁾ その限りで階級間の対立をむしろ煽るようなものだ。だがサッルスティウスは、この演説が後に影響を及ぼした展開を、おそらくマリウス自身の意図とは異なるものとして描いている。その後マリウスは、階級に関係なく自発的に応募する人を徴兵し、その結果、多くは無産市民が登録することになった。その後、マリウスは彼らを軍隊に組み入れ、それほど重大ではない戦闘に従事させるのだが、そのことによって「短い期間に、新参の兵士も古参の兵士も結束して、みな等しく勇気を持つようになった（*Sic brevi spatio novi veteresque coaluere et virtus omnium aequalis facta*）」⁽¹⁶⁾。マリウスの民衆に呼びかけた演説は、マリウス本人の意図はともかく、多くは貴族を指揮官とした軍隊に無産市民を組み入れることによって、ユグルタ戦争の早期終結に向けてローマ市民を一致団結させる効果をもった、としているのである。

他方、マリウスと対照的に貴族の代表格であり名家の出身であるスッラの演説は、戦況を左右する難しい状況の中で行われる。それは敵の同盟者の籠絡を目的とする非常に狡猾なものであった。スッラは、マリウスに命じられ、もう一人の指揮官であったアウルス・マンリウスとともに、宿敵ムミディア王ユグルタの同盟者であるムーア人のボックス王の元に派遣される。甘言を用いて敵の同盟者の裏切りを唆すという難しい任務である。派遣された二人はボックス王に対峙して、マンリウスは、より弁論の技能に優れたスッラに役目を譲って、スッラが次のように語った、という。

ボックス王よ、ついに戦争より平和を選び、また偉大なあなたが最悪の王ユグルタと手を結んで自らに汚点を付けぬような思いにいたっていただけたとはわれわれにとつて大いなる喜びです。実にあなたにとつて、われらの友誼ほど望ましいことはありません。あなたが最初にこの機会を捉えてくれましたら！この時まで受けた不幸よりも、はるかに多くの幸運をローマ人たちからきつと受けることになりましたのに。ですが、運命は人間の命運の大半を握っていて、あなたがわれらローマの実力も友誼もご経験になることをお好みの方ですから、さあ急いでそれが認めるところに従い、前に向かい始めていただきますよう。あなたには、これまでの過ちを善意によつて容易く贖う多くの機会があるのですから。最後に、ローマ人は善意の犠牲者にはならないと、心に刻みこんでいただきますよう。われらの戦時の強さはすでにお判りでしょうから。Sal. Jug. 102.5-11.

スッラの説得は、相手のボックス王に露骨に屈服を自覚させ裏切りを推奨するものではなく、王の矜持を傷つけぬよう遠回しに、そして脅しも効かせつつローマへの協力を必然であるかのように説く巧みなレトリックを用いているように思われる。⁽¹⁷⁾ おそらく口下手なマリウスにはこのような弁論は難しいだろうが、この役目をスッラに譲ったのはマリウスの卓見であった。この後、幾つかの顛末があり、王の気持ちも揺れるが、ついに王をして、親愛なるスッラの友情に応えたいとまで言わしめる。⁽¹⁸⁾ そして王は心の葛藤を残しながらも、不承不承にかつての盟友ユグルタ王を異にかけることに合意して、その身柄をスッラに引渡し、ヌミディア戦争の終結を手助けすることになる。サッルスティウスは、このスッラの弁論から始まる働きかけが、ユグルタ戦争におけるローマの勝利に大きな役割を果たした重要な転機であったと捉えていた、と考えることができる。

このように『ユグルタ戦記』においてマリウスとスッラは、『カティリーナ戦記』におけるカエサルとカトーのように、対照的な性格を持ちながらも、ローマの戦勝と栄光という共通の目的に向けて、お互いを必要とする関係に

あると捉えられていた。そして彼は、この書でもまた、マリウスとスッラの性格描写を通して、双方の生まれ持った徳が対照的であるとともに相互補完的であることを浮き彫りにしようとしているのである。

一方のマリウスは、「勤勉、廉直、偉大な軍事能力、尋常でない戦時の気力、平常の穏やかさ、欲望と豪奢の克服、栄光のみへの渴望」など、古来の家系だけを除いて、執政官になるために不可欠なすべての資格をもっていたと称賛される。だが反面、「ギリシャ語の雄弁にも都会的な社交界にも縁がなく(non Graeca facundia neque urbanis mudiis)」早くから軍隊で鍛錬されたため座学の経験が少なく、地位の高い人たちとの交流が乏しく、洗練された生活様式を知らなかったとされる⁽¹⁹⁾。都会的な貴族ではなく叩き上げの平民、雄弁の人ではなく軍功の人、とされているのである。

それに対してスッラは、歴史を辿れないほどの古来の家系を有する生粋の貴族であり、「ギリシャ語・ラテン語どちらにも熟練・習熟し(litteris Graecis et Latinis iuxta atque doctissime)、尋常ならざる気性、快楽を望むが栄光も望み、閑暇においては贅沢」と評され、「雄弁で、賢明であり、容易に友人をつくれること」が挙げられる。粗野な平民ではなく洗練された貴族、行動の人ではなく外国語に堪能な学識の人、武骨で気難しがり屋ではなく社交的な口達者、とされているのである⁽²⁰⁾。

このようにサッルスティウスにおいて、マリウスとスッラは対照的な性格を備えた人物として描かれるが、双方とも栄光を求め、ローマの共通の利益のために身を捧げる突出した徳の持ち主であったとされる。マリウスの行動力とスッラの弁論術は、ヌミディアでの戦争を有利に進めるうえで必要不可欠であったのであり、二人の力量が合わさってローマを勝利に導いた、とされているのである。その意味では彼らもまた相互補完的な関係にあったと捉えられていた、と言うことができるだろう。

サッルスティウスの意図は、カエサルとカトー、マリウスとスッラを根本的に性格の合わない敵対者としてではなく、むしろそれぞれが公共体の福祉や共通善の実現を求めて才能と努力を尽くし合う競争者^{アイザル}として特徴づけようとしたところにあったように思われる。彼らが生来的に性の合わない敵同士であるだけならば、相互に威嚇と暴力を振り合い、ローマを戦禍と混乱の渦に巻き込む顛末——実際のローマ史はその後その通りになるのだが——を描く方が自然である。しかしサッルスティウスは、彼らの性格を対照的に描くとともに、どちらも共通の目的を指して演説する姿を描くことによって、両者が互いの力量を必要とし合う相補的な関係にあったと捉えていたように思われる。

レトリックは内紛を常軌化する言論手段

以上の考察は、サッルスティウスの「レトリックと共和政との関係」観について示唆を与える。それは彼が、対照的な性格を有する共和政時代の政治家たちが相互に準拠できる共通の基盤としてレトリックを捉えていたことを伺わせてくれるように思われる。すなわち彼らのそれぞれ異なる性格や意向をうまく引き合わせ、彼らの対立のエネルギーを軌道に乗せ、公共体の福祉や共通善に目を向けさせる役割を担ったのが、理性的な言葉のやりとりであり、レトリックを駆使する弁論であった、ということである。サッルスティウスは、先述の通りケイパストによれば、レトリックをローマ共和政における諸々の対立を橋渡し・内紛をうまく調整するための手段として捉えていた、という。確かにローマには建国期から対立と緊張が継続し、しかもそれらは戦時でさえ完全に解消できない常態となっていた。だからこそ公共体を維持・存続させ、市民の間に調和と一致をもたらすためには、対立を橋渡しする弁論の機会と技能が必要とされたのである。すなわち「レトリックがしようとしたことの一つは、それが『合理的に組織だった体系』である限りで、共和国の対立関係に解決を見出すことであつた」。共和政が永続するためには階

級間の一致や調和が目標とされる必要があり、「レトリックの行使はまさにこうした目標を達成することができる。こうすることでレトリックは、ローマ人の共同体の様々な異なる要素をまとめて、ローマ共同体を維持する役に立つ」と考えられたのである。⁽²²⁾

サッルスティウスは、『カティリーナ戦役』においてカエサルとカトーとの間の論争、そして『ユグルタ戦記』においてマリウスとスッラの演説に焦点を当てたが、それらはまったく対照的な性格を有する二人の人物が行使したレトリックが、彼らの異なる性格と同様に、ローマの共通目的にとって重要な補完性をもつことを浮き彫りにするためであった、とも言える。⁽²⁴⁾ 対照的な彼らの演説は、ローマ共和政における対立と緊張をいわば象徴しており、レトリックが共和政の中で果たしている補完的な役割をいっそう際立たせる。もし彼らに弁論の機会が与えられなければ、物理的な暴力や威嚇に訴えることによって、あるいは戦争を無為に長引かせることによって、ローマ共和政は分裂と崩壊への道を辿ることになったかも知れない。彼らは、弁論の機会が与えられることで、ローマ共和政を崩壊させることなく存続させることができた。その意味でレトリックは、共和政の秩序を維持するために必要な、対立に正当な場を与える「安全な内的排出口（safe internal outlet）」⁽²⁵⁾、あるいは対立を構造内部に組み入れ常軌化する（regularize）手段であったと言つてもできよう。⁽²⁶⁾

キケローとの相違

このようにサッルスティウスの「レトリックと共和政との関係」観を捉えるならば、それがどのようにキケローの理解と異なるかを明らかにすることができるだろう。両者とも、レトリックがローマ共和政において重要な役割を担っていると考えていた点に相違はない。だがサッルスティウスは、次のような点でキケローと異なっていたと考えられるのである。

第一に、前提となるローマ史の認識そのものの違いである。キケローは、とりわけ激変する政治状況に散々振り回された晩年の個人史から見て、とてもローマが平和で安定していた時代状況であったという認識はもっていなかったであろうが、しかし少なくとも共同体の感性に訴えることができるほどの共通善の感覚や同胞意識がローマ人たちに共有されていたという希望はもっていたであろう。それに対してサルスティウスは、建国期からローマには対立と緊張が持続・常態化していたとの認識があった。それらは、外敵の脅威か、あるいはレトリックを行使する弁論の機会にしか克服することができず、しかもこうした偶然や措置があつても一時的にしか社会的結束は成立しない、と考えていたのである。むしろ対立そのものは、ローマ人たちが享受した自由の必然的帰結であり、ローマの繁栄と栄光をもたらす生産的な活力であると積極的に評価さえされている。サルスティウスは、内紛と緊張がローマ史に固有の常態的現象だと理解していたのである。

第二に、ローマ最盛期とレトリックとの関係の認識の違いである。キケローは、ローマがカルターゴを征服した後には最盛期を迎え、弁論は戦争や動乱から解放された時代に最も発展すると考えていた。そして弁論は、カエサルのような独裁者が出現したときに喪失したとして、それまでに繁栄を謳歌したとする。すなわちキケローにおいて、ローマ最盛期とレトリックの隆盛は重なっていると考えられていたのである。それに對してサルスティウスは、むしろ第二次と第三次のポエニ戦争においてローマが最盛期を迎えたと述べており、その期間はむしろレトリックではなく、外敵の脅威によってローマの社会的結束がかるうじて保たれていたと考えている。彼の歴史認識ではローマは建国期から対立と緊張を常態的に抱えており、それらは、カルターゴのような外敵の脅威という歴史的偶然がない限りで、弁論機会の提供によって常軌化する必要がある。その意味でレトリックは、平時における外敵の脅威の代わりであつて、ローマ最盛期にはむしろ用いられず、その後が必要とされたのである。

第三に、本稿にとって最も重要な点であるが、ローマ共和政におけるレトリックの役割に関する認識の違いであ

る。キケローは、レトリックが自由で平和な時代において開花すると考えた。弁論は、共同体の感性に訴えることによって、公共体の福祉や共通善の実現に役立つ手段であった。すなわち彼は、融和的・協調的なローマ共和政の状況において、レトリックが調和コンコルディアの上に意味をもつと考えていたと言える。それに対してサッルスティウスは、むしろレトリックを、対立を橋渡しし正しい順路に方向付ける手段として捉えた。彼の認識では、ローマでは建国期から対立と緊張が常態化していたが、それらが野放しにされローマに分裂と破滅をもたらさぬように、それらを常軌化する手段としてレトリックを評価していたのである。すなわちサッルスティウスは、対立的・闘争的なローマ共和政の状況において、レトリックが不ディスコルディア和の上に意味をもつと考えていたのである。⁽²⁸⁾

以上を要約すると、サッルスティウスにとってレトリックとは、ローマ共和政において対立を橋渡しし正しく方向付ける手段であった。彼は、ローマは建国期から対立と緊張が続いてきたとの認識をもって、カルターゴという外敵の脅威がローマ人を一時的に結束させたものの、平時ではそれに代わって弁論の機会がローマ人同士の内部対立を何とか調和させた、と考えた。すなわち彼によってレトリックは、共和政において常態化した内紛を常軌化する言論手段として捉えられたように思われる。⁽²⁹⁾

四 リーウィウス——善き意思によって共和政に調和をもたらす技術？

ティトゥス・リーウィウス（Titus Livius）は、キケローとサッルスティウスよりやや後代の共和政末期から帝政初期にかけて生きた歴史家である。政治家としての経歴はないようで、キケローやサッルスティウスらの著作活動に影響を与えたような政治的背景は比較的少ないと考えられる。だが元首アウグストゥスの庇護の下に執筆した経

緯があるわりには、共和政賛美の傾向が強いと言われている。彼の主著である『ローマ建国史』は一四二巻からなる大著であるが、一巻から一〇巻までと二一巻から四五巻までの計三五巻、その他一部の断片と要約のみが残存している。本章では、リーウィウスの著書のうち主として一巻から一〇巻までを対象に、ケイパストの読解を共和主義者たちの観点から批判的に検証することを通して、リーウィウスの「レトリックと共和政との関係」観を検討したい。

ローマ史叙述の基調は調和にあった

リーウィウスは『ローマ建国史』、とりわけ一巻から一〇巻までにおいて、調和 (concordia) の事例について繰り返し述べている。ローマは、戦争や内乱に何度も見舞われながらも、その運命を左右する重要な局面では、平民や貴族を問わず市民の間の友愛を確認することによって階級間の紛争を解決してきた。ケイパストによれば、このように調和こそがリーウィウスの歴史叙述において最も中心的な観念であった、という。彼によればリーウィウスは、ローマ史における調和の逸話を幾つも紹介しているとされるが、ここではその中から重要なものを三つだけ挙げておくことにしたい。

第一に、ローマが王政を廃止して共和政の道を歩み始めた頃の逸話である。リーウィウスは、王政ローマの最後の王タルクィニウス・スペルブスを追放したルーキウス・ユニウス・ブルートゥス^{コルネリウス}が初代の執政官となったときに、彼が最初に打ち出した政策——元老院の増員——について次のように評価している。

次に行なったのは、騎士階層の有力者を選び、先王による殺害によって減少していた元老院議員の数を合計三〇〇にすることであった。この階層から多くの人数を迎え入れることにより、元老院の力を強化しようとしたの

である。…この議員補充は、市民の融和、とりわけ、貴族と平民の心を一致させるのにおおろくほど役立った（*mirum quantum profuit ad concordiam civitatis iungendosque patribus plebis animos*）。Liv. 2. 1. 10-11 [(1) 一二九。傍点は大森による。]

第二に、ローマが周辺部族との争いの中で危機に陥ったときの逸話である。リーウィウスは、ローマが同時期に二つの戦争を仕掛けられ、一方のウォルスキ人征伐のために派遣された執政官アッピウス・クラウディウスが兵士たちの不評を買って失敗した事例と比較して、他方のアエクイ人征伐のために派遣されたもう一人の執政官ティトゥス・クインクティウスの成功した事例を次のように紹介している。

対アエクイ戦はこれとは対照的に、コーンスルと兵士たちが、互いの友情と信頼で競い合った（*inter consulem ac milites comitate ac beneficiis certatum est*）。そもそもクインクティウスは生まれつき穏和な人物であったが、同僚コーンスルの不幸ともいえる不寛容をみるにつけ、いつそう自らの気性に満足を覚えるようになった。指揮官と軍隊がこれだけ一致団結していれば、アエクイ人は反撃することもかなわず、ローマ軍が領域を蹂躪し略奪をほしきままにするのを、手をこまぬいて見ているほかはなかった。この時ほど広い範囲から戦利品がかき集められたことはこれまでのいかなる戦さにおいてもなかった。そのすべてが兵士たちに分配された。また、称賛の言葉も贈られ、褒賞に劣らず兵士たちの心にうれしく響いた。また彼らは指揮官に対してだけでなく、指揮官を通じて元老院に対してもかつてないほど友好的な軍として帰還した。そして、自分たちは元老院から父親を授かったが、他の軍は暴君を与えられたと語った。Liv. 2. 60. 1-3 [(1) 二四二—四三。傍点は大森による。]

これら二つの事例の背景には、ブルートゥスとクインクティウスに共通する個人の気質があった。それは、善き意思 (*benevolentia*) である。善き意思とは、市民の間で、とくに指導者と指導される人々の間に和解と融合をもたらす気質であると考えられた。ブルートゥスは、先王の追放後に自身の権力に拘らず「寛厚かつ穏健な支配」をもたらした「自由の保護者」であつたし、クインクティウスは兵士たちと「友情と信頼」を競い合うほどの「生まれつき温和な人物」であつた。そこで第三にリーウィウスは、もう一人の善き意思を備えた人物として、ブルートゥス以外にも共和政への移行に尽力した人物を挙げている。救国のためサモニウム人たちと争い、弁論でも名高かつたプブリウス・ウァレリウス・プブリコラである。

兵士にとって、これほど親しみを持てる將軍は他にはなかった (*Non alias militi familiarior dux fuit*)。なにせ彼は、最下層の兵卒に混じつてすべての役務に従事するのを厭わなかったのだから。さらに兵士が行なう競技で同年配の者たちが互いに速さと力を競うとき、横柄ではなく、親しみやすかつた。勝つても負けても顔色を変えず、誰が敵手となつて挑戦しようとするに拒まない。行動は状況に応じて寛大であり、言葉を発するときには自分の威信と同様に他人の自由を忘れない。そして(これが人々に一番気に入られたのだが)公職を、求めたときと同じ態度で務めた。かくして全軍は信じられないほどの熱狂で將軍の激励に答え、陣営から出撃する。[iv. 7. 33. 1—4] (3) 一六八

善き意思は、兵士を鼓舞し戦意を高める最高司令官の気質であるばかりではない。軍隊ばかりではなくローマ共和政そのものに和平を及ぼす調和の源でもあつた。善き意思と、そこから導かれる調和——これらがリーウィウスの著作において、ローマの史実を彩る重要な要素であつたと考えられる、というのである。⁽³⁾

キケローと同調的

こうしたリーウィウスのローマ史観は、ケイパストによれば、キケローと同じ精神基調にある、という。二で検討したように、キケローは、レトリックは自由で平和な共和政において意味をもつと考えていた。確かに彼は、公共体を多様な楽器や声色からなる音楽隊になぞらえ、調和コンフォルディアを音楽のハーモニーの市民的等価物であると考えていた。彼は対話編『国家について』において、登場人物スキピオー・アエミリアヌス・アフリカーヌスの口を借りて、以下のように語らせている。

じじつ、琴あるいは笛、さらに歌そのものや音声においてさまざまな音から成るある調和を保つことが必要であり、それが変えられ、あるいは外れるなら、訓練を受けた耳は耐えることができないように、またその調和がきわめて多様な声の統御によって一致融合したものとなるように、そのように、音に比すべき上中下の階級から成る国は統御された理性のゆえにきわめて多様な要素の一致において調和する。そして、歌において音楽家によつて調和と呼ばれるものは、国においては一致（*quae harmonia a musicis dicitur in cantu, ea est in civitate concordia*）、すなわち、すべての国家において安寧のための最強最善の絆であり、一致は正義なくしては決して存在しえないのである。Cic. rep. 2.42 [一〇六。傍点は大森による。]

キケローにおいて、国家が自由で平和であるためには、正義はもちろんのこと、市民の間に調和がなければならぬ。それは、音楽が優れていると称賛されるためには、様々な楽器を受け持つ演奏家たちが同じ調子で演奏しなければならぬのと同様である。さらに彼は、ケイパストによれば、リーウィウスと同様に、善き意思ベネウオレンティアの働きについて語っている、という。キケローは、理想的な指導者は、自分自身が見習うべき模範となるように振舞うこと

で、民衆を教育してよい影響を与えるべきだと考えている。しかもそのような指導者の気質は、生来の徳性であつて、フミキキテイア友情という自然的感情によるものであるとする。彼は『友愛について』において、登場人物ラエリウスの口を借りて次のように語らせている。

…友情にはまた別の原因、もつと蒼古として美わしく、もつと人間の本位そのものに由来する原因があるのだろうか、という問題だ。というのも、友情 (*amicitia*) という名の元になった愛 (*amor*)こそ、人々の善き意思ベネウオレンテイアを結びつける原動力なのだから…わしには、友情は欠乏からというより人間の本性から生まれるもののように見える。そこにどれほどの実益がありそうかを計算することではなく、愛する気持ちを込めて心をふり向けることにより、友情が生まれるのだ、と。Cic. amic. 8. 26-27 [八二、ただし訳語を一部変えている。]

徳性と友情からもたらされる善き意思、そこから導かれる調和——キケローに見られるモチーフは、まさにリーウィウスに見られるそれと同種である。ケイパストによれば、リーウィウスはキケローと同様に、政治的指導者が自ら模範となつて善き意思を示し、聴衆との間に相互信頼と調和を与えることによって、健全な共和政を成立させ維持することができると捉えている、とされるのである。⁽³²⁾

レトリックは善き意思と調和をもたらす

リーウィウスが、キケローと同じく、善き意思と調和を中心的観念として共和政を理想化したとするならば、こうした観点からレトリックを理解したとしても何ら不思議ではない。ケイパストによれば、リーウィウスはキケローと同様に、指導的政治家の行為をレトリック化 (*rhetorization*) した、という。すなわち高位の公職者が有徳に振

る舞う姿を際立たせるために、政治家を雄弁家として、すなわち演壇に立ち民衆に語り掛ける優秀な弁論家の姿として描いた、ということである。ケイパストによれば、キケローは理想的な政治家について語るとともに優れた弁論家について語ってもいたのであって、理想的な政治家が有徳によって民衆から評価されるのと同様に、優れた弁論家は雄弁によって聴衆から評価される。そのため政治家＝弁論家は、民衆＝聴衆に向かって巧みなレトリックを用いて雄弁を振るい、高潔で公正な人格であることを自ら示すことになる。そしてリーウィウスもまた、キケローと同じように、指導者たる弁論家が民衆に向かって徳を示し、雄弁を通して聴衆から承認されることに主たる関心をもっていた、という。⁽³³⁾この点で「キケローによるレトリックに関する著作とリーウィウスの間には魅力的なパラルがある」⁽³⁴⁾、というのである。

リーウィウスは、ケイパストによれば、指導者が弁論によって調和をもたらした事例を幾つか挙げている。その中でも最も重要視されているのが、ローマ史上有名な平民の市外退去事件である。彼は、元執政官メネニウス・アグリッパ・ラナトウスが、執政官の命令に怒って郊外の山に退去し立て籠もる平民に対して、平民と貴族のどちらをも人間の不可欠な身体部位に譬えて、ローマ市民の一体性を強調して説得に成功した事例を紹介している。少々文章が長いが引用しておこう。

平民のもとにメネニウス・アグリッパを使者として派遣することに衆議が一致する。彼は弁の立つ男であり、かつ平民出身であったので、説得力を持つと考えたのである。彼は陣営に招き入れられると、次のような話を昔風に、ただ朴訥と語ったと伝えられている——人間の体の中で昔は、今のようになつて働いてはいなかった。体のそれぞれの部分にそれぞれの考え、それぞれの物言いがあつた。あるとき腹に対して体の他の部分が不公平を口にした。「自分たちは腹のためを思つて骨を折り、何でも手に入れてやろうと尽くしている。し

かし、腹は体の真ん中にのうと納まり、好きなものをもらって喜ぶ以外に何もしない」。そこでこう申し合わせをした。「手は、口に食べ物を運ぶのをやめよう。口は、何か運ばれてきても受け入れるのをやめよう。齒も、嚙むのをやめよう」。こう息巻きながら、腹を飢えて懲らしめようとしているうちに、手足もろとも体全体が弱り切ってしまった。これでわかったのは、腹も奉仕をなまけていたわけではなく、養われるとともに他を養っていたということだ。腹は、人間が生きて動くためにかかせない血液を体全体に送り返している。その血液は、消化された食べ物によって滋養豊かなものとなり、血管を通してまんべんなく体全体に行き渡っていく——。このようにアグリッパは、体の内輪もめと平民の貴族に対する怒りがいかに似ているかを示して、人々の気持ちをなだめた。

こうして市民一致に向けての調停が始まり、次の条件で合意がなった (*Agri deinde de concordia coeptum concessumque*)。すなわち、平民は彼ら自身のための公職者を得ること、その者は身体不可侵とし、コーンスルに對抗して平民を擁護するための特権を有すること、また、その職に貴族が就くことは許されざること。こうして護民官が任命された。Liv. 2.32.11-33.2 (1) 一八六—八八。括弧は大森による。』

この逸話は、その後の階級間の力関係を変えた護民官の設置という画期的事件、その意味でローマ史の中で大きな影響を与えた事件の顛末を扱っている。⁽³⁵⁾ リーウィウスは、この事件の中で、アグリッパの弁論が、反乱を起こした平民を説得することに成功した点を挙げることによって、彼の善き意思がレトリックを通して調和をもたらしたことを浮き彫りにしている。⁽³⁶⁾ リーウィウスにとってレトリックとは、ケイパストによれば、指導者によって政治共同体を創成・存続させるための不可欠の手段であって、指導者はそれを習熟することによって公共体をまとめて統合しなければならぬ。「したがってレトリックは——そして指導者の地位のレトリック化は——共和政の政治共

同体の提携と協働を育む役に立つ⁽³⁷⁾。こうしてレトリックは、リーウィウスにとって、政治家＝弁論家の善き意思を通して共和政に調和をもたらすものとされるのである。

サッルスティウスと対照的

こうしたリーウィウスの「レトリックと共和政との関係」についての調和的理解は、ケイパストによれば、同じ歴史家であっても、サッルスティウスの理解とはまったく異なる、という。サッルスティウスは、三で検討したように、ローマは外敵の脅威によつて階級間の対立を越えて結束するが、外敵の脅威が無くなると内紛を再発させたとの歴史認識をもっていた。そして雄弁家たちの演説が、外敵の脅威の欠如を埋め合わせるかのように、彼らがそれぞれ備える対照的な性格を相互に補完させ、共和政ローマの秩序と安定をもたらすことになった、としていた。すなわちレトリックとは、外敵の脅威に代わって内紛を常軌化する言論手段として理解されていたのである。

ところがケイパストによれば、リーウィウスの歴史叙述には、サッルスティウスの叙述で強調されていた外敵の脅威はそれほど大きな役割を果たしていない、とされる。確かにリーウィウスが外敵の脅威に言及している箇所は幾つか散見されないわけではない。リーウィウスには、外敵の脅威によつて少なくとも仮初めの和平がもたらされた史実も承知されていたろう。だが、リーウィウスの叙述ではその役割は限定的であり、それをはるかに上回る数の調和の事例が挙げられている。外敵の脅威は、ローマ共和政の平和と繁栄にあまり関係はない、というのである⁽³⁸⁾。

むしろリーウィスは、ケイパストによれば、貪欲と奢侈（*avaritia luxuriaque*）をローマの頹落と衰退の要因として捉えている、という。富や権力がもたらす欲求は、貴族や平民を問わず、さらなる欠乏の感情を生み出し、それぞれ相手側の階級への憎悪をいっそう掻き立て続ける。確かにリーウィウスは、『ローマ建国史』序文において、^{アウァーリア・ルックスリア}貪欲と奢侈が彼の同時代のローマの苦境と窮状をもたらした、と述べている。

…綱紀が徐々に弛むに従って、道徳がいかに廢れてきたのかにも心を向けてほしい。それはまず建物が倒れるときのように揺れはじめ、やがて徐々に傾き (*deinde ut magis magisque lapsi sint*)、倒壊寸前となって、ついにわれわれの時代、すなわち、われわれが自らの欠陥にも修繕にも耐えられなくなったこの時代に立ち至ったのである。…今や、富が貪欲を引き寄せ、放蕩と快楽を通じて脹れあがった欲望が、すべてを破滅と終焉に至らしめる欲動を生じせしめている。Liv. praef. 9-12 (一) 五—六。傍点は大森による。』

貪欲と奢侈は、政治家Ⅱ弁論家と民衆Ⅱ聴衆から善き意思と調和を奪う悪徳である。これらの悪徳はローマ社会を根底から蝕み、貴族と平民との階級間の対立を次第に燃え上がらせる。ケイパストは、リーウィウスの認識において、このプロセスが「漸次的」とされている点に焦点を当てている。リーウィウスのローマ史理解は、「漸次的」である点でもサッルスティウスのそれとは対照的である、という。というのもサッルスティウスにおいて、ローマの危機と衰退は、戦勝などによって外敵の脅威が「唐突に」取り去られる、まさにその瞬間において始まるからだ。⁽³⁹⁾ 貪欲と奢侈という悪徳は、ローマの貴族と平民の心の奥底に巣くい、目に見えず誰にも気づかれないうちに、ゆっくりとローマ社会の根底を蝕み、終には台無しにしてしまう。こうしたリーウィウスのローマの衰退史観は、サッルスティウスと対照的に、段階的で緩やかなプロセスだ、と考えられる。

こうした歴史認識の相違は、リーウィウスとサッルスティウスとの間にレトリック観の相違をもたらし。サッルスティウスにとってレトリックは、先述したように、「外敵の脅威に代わって内紛を常軌化する言論手段」と考えられたのであった。しかしリーウィウスにおいて、ローマ衰退の原因が外敵の脅威の突発的消滅に求められないのならば、レトリックが階級間の不和を解消するための即効薬であると捉えられることはない。むしろリーウィウス

のレトリック観は、政治家・弁論家の善き意思が表出されて、階級を越えてローマ市民に調和を醸成するものとして理解される。⁽⁴⁰⁾それは、サッルスティウスの歴史認識からは導き出すことができない。というのもサッルスティウスにおいて、社会的階級間の対立は、融和されるどころか解消不可能なまま常態化しており、外敵の脅威という外的事情によって当面の間だけ除去されるにすぎないからだ。彼の理解においてレトリックは、弁論という言論の枠組みを与えることで、異なる階級・階層が暴力に訴えて決裂してしまうことをかろうじて防ぐ、外敵の脅威の代替物でしかないのである。

リーウィウスの後裔たち——公民的共和主義者の理解

こうしてリーウィウスの「レトリックと共和政との関係」観は、ケイパストによれば、ケケローの調和的理解とサッルスティウスの対立的理解との両極の間で、ケケローの側に位置付けられている。だがリーウィウスの歴史叙述の複雑さと多様性は、そのような単純な位置付けを許すのだろうか。ケイパストの解釈にどうしても疑念が生じてしまうのは、リーウィウスの影響を受けた後の公民的共和主義者たちが、彼の著作の中でむしろ対立と不和の要素に着目しているからである。

たとえば、ルネサンス期の公民的共和主義の伝統に連なる著作家として近年では理解されるようになってきているニコロ・マキャヴェッリがその嚆矢である。彼の著書『デイスコルシ』がリーウィウスの『ローマ建國史』に負っていることはよく知られている。⁽⁴¹⁾彼は同書の中で、リーウィウスが階級対立によって国家が崩壊していく様を的確に記述しているとして、次のように引用している。

…新しい紛争と果てしない混乱がひきもきらずローマにおそいかかってきたのであった。なぜこのような事態

が生じたかという理由について、ティトウス・リウィウスは、きわめて適切な解明を与えているので、ここでは自分の意見にかえて、リウィウスの言葉そのままを引用しておこう。リウィウスは次のように言っている。人民の側でも貴族の側でも、どちらか一方が下手にでるようなことがあると、他方は「思いあがって」居丈高になるものだ……このように、貴族にしろ人民にしろ、自分たちの自由を守ろうと熱中すれば、いずれの側も、敵を圧倒できるだけの力をそなえるようになってくるものだ……このようにして、まるで世の中は、支配する者と征服される者となり、なってしまう。*Discorsi*, I. 46. [一二六]

しかもマキャヴェッリは、この箇所の直後にサッルスティウスの見解に言及しており、同じ文脈の中で彼の見解を紹介している。彼は、ローマの階級間対立が人間に本来的に備わる野望を追求した必然的結果であるとの認識を、リウィウスとともに、サッルスティウスからも得ているのである。⁽¹²⁾ この意味で彼のリウィウス理解は、サッルスティウス理解と同様に、対立的解釈に立っているとも考えられる。⁽¹³⁾

ところがケイパストは、こうしたマキャヴェッリのリウィウス解釈は類を見ない特異な (*idiosyncratic*) ものであって、こうした対立的解釈が成立する根拠はリウィウス自身の著作には見出せない、という。⁽¹⁴⁾ しかしマキャヴェッリを公民的共和主義の伝統の起源に位置付ける彼の後継者たちは、まさにこのリウィウスの対立的解釈からインスピレーションを与えられ、彼の共和主義思想を発展させてきたのである。たとえば現代のマキャヴェッリ研究で著名なマウリツィオ・ヴィーロリ (*Maurizio Viroli*) は、マキャヴェッリにとって共和政に対立はつきものであって、むしろ対立が生じることを歓迎さえしていたとして、次のように述べている。

マキャヴェッリは『デイスコルシ』において、ローマにおける平民と貴族との間の社会的対立を自由保持の主

要・な・動・因・と・し・て・賞・賛・し・て・い・る。彼の記述では、こうした対立は、市民一般の自由を支持する法や法令——すなわち平民と貴族の利益を少なくともある程度満たすという法——を導くのだ。彼は、ローマ史から現代の共和国にも通用する一般的アドバイスを引き出す。つまり、平民と貴族という「二つの気質が存在するすべての共和国において」、自由を支持するすべての立法は両階級の間の衝突によってもたらされる、ということ⁽⁴⁵⁾を。

またこれに関連して、現代共和主義の代表的論者として知られているフィリップ・ペティット (Philip Pettit) も、民主政を合意による (consensual) —— 換言すれば、調和的な —— ものではなく、異議申し立てによる (contestatory) —— 対立的な —— ものとして理解している⁽⁴⁶⁾。彼は、共和政の混合政体の中で作用する一部門としての民主政が、エリート支配や多数者専制に抗して健全に作用するためには、異議申し立てが不可欠な制度的要因になるだろうとして、次のように述べている。

民主政は、合意よりもむしろ主として異議申し立てによるモデルに基づいて、それほど無理なく理解されるかもしれない。このモデルでは、人々が個人としても集団としても、政府の決定に異議申し立てをする恒久的な可能性を享受するかぎり、政府は民主的であり、人々によって制御される統治の形態を示すことになるであろう⁽⁴⁷⁾。

このように現代の共和主義者たちは、マキャヴェッリのリーウィウス解釈を受け継いで、社会内部の対立をむしろ歓迎する。それは、共和政のダイナミックな発展を促す活力、すなわちある種の「燃料」として評価するからである。しかし彼らは社会的対立が、何かで「引火」した結果、共和政そのものを瓦解させてしまう危険な「火事」となることまでは許さない。共和主義者はまさにここにおいてレトリックの意義を見出す。すなわち共和政を、人

々が私益を求めて暴力を振るいあう分裂的状况としてでも、人々が単一の共通善の下に結束する融和的状况としてでもなく、利益や信念を違える敵対者を説得することを通してそれらをうまく妥協・調整し、相互に共存できる枠組みと秩序を築き上げていくプロセスとして理解する、ということである。この意味でレトリックは共和政にとって重要な価値を有するのだ。ヴィーロリは次のように述べている。

まさに共和主義論者は、共通善が各人全員の善であると考えていないために、市民生活の枠内に収まっている限り、社会的・政治的対立が起こることも怖れていないし、公の場での会合で起こる、レ・トリックの衝突の価値を評価しているのである。⁽⁴⁸⁾

このようにリーウィウスの描くローマ共和政の史実を自由の模範として受け継ぐ後の共和主義者たちは、ケイパストの理解に反して、リーウィウスが対立と内紛の歴史を記し、その前提の上にレトリックを位置付けていると捉えているのである。⁽⁴⁹⁾では実際、リーウィウスのテキストには、マキャヴェッリやその後の共和主義者たちが見出した対立的要素は見られるのだろうか。以下で検証してみよう。

外敵の脅威が国内対立を収束させる

リーウィウスの『ローマ建国史』には、最初の一〇巻だけでも、ケイパストの理解に反して、サッルスティウスと同じ基調で叙述されている箇所が散見される。それは外敵の脅威への言及と、対立的な演説の場面の叙述という二つの点に見られる。

まず外敵の脅威への言及という点でリーウィウスは、「外敵の脅威は国内の平和を維持する」との史実理解を

サッルスティウスと共有していると考えられる。それは、ローマが周辺部族らとの抗争を繰り返して、農地法をめぐる闘争のように貴族と平民との間の利害対立が激化した共和政初期の時代認識において明らかである。とりわけ『ローマ建国史』の最初の一〇巻において、そうした記述を数多く見出すことができる。ここでは、三つだけを挙げておこう。

第一に、ウォルスキ人たちがローマ領地に侵攻したときの事例である。平民の怒りを買った有罪宣告を受けた元老院議員グナエウス・マルキウス・コリオラーヌスは、ウォルスキ人のもとに亡命し、彼らの有力者であったアッティウス・トゥリウスと結託して、ローマで開催された大競技会にウォルスキ人たちを引き入れた際、彼らが厄介事を起こすだろうと執政官に内密に唆して、彼らを追い出すように囁ける。トゥリウスは、こうして追い出されたウォルスキ人に向けてローマからの離反を促す演説をし、次々にローマ周辺の町々を占領させる。このウォルスキ人たちの脅威に対して、リーウィウスはローマ側の対応を次のように述べている。

（トゥリウスは）そこからローマの農地の略奪にかからせたが、略奪兵の間に監視を置き、貴族たちの領地に手を付けることは許さなかった。これは、彼が平民に対してより強い敵意を抱いていたためか、あるいは、貴族と平民の間に不和を生じさせるためであったかのいずれかである。たしかに不和の生まれる要素はあった。というのも、護民官は市民団の有力者を激しく批判し、すでにたけり狂っていた平民たちをさらに刺激していたからである。しかし外敵の脅威は、市民を一致させる最大の絆であり、いかに互いが疑心と憎悪を抱き合っていたにせよ、両者の心を結びつけずにはおかなかった（sed externus timor, maximum concordiae vinculum, quamvis suspectos infensosque inter se iungebat animos）Liv. 2. 39. 7（「一」二〇〇、傍点と括弧は大森による。）

第二に、逆に外敵の脅威がなくなった後に、国内の階級対立が噴出しそうになった経緯が紹介される。アエクイ人やサビニ人たちの大軍がローマに押し寄せ周辺を略奪したことに對して、元老院は田畑で働いていたところのルーキウス・クインクティウス・キンキンナトウスを独裁官に指名し、その對策に当たさせた。彼が首尾よく擊退して凱旋式をあげ、権力に拘ることなく早々に独裁官職を辞すると、戦時に中断され継続審議中とされていた、テレンティリウス法案——執政官の権限を法によって制限する内容の法で、貴族と平民との間の利害対立の焦点であった——が再び蒸し返されそうになる。リーウィウスは、この国内の階級対立の火種が偶発的な外敵の侵攻によってかろうじて避けられた経緯を次のように紹介している。

∴ 対外的には平穩無事だったが、国内的には同じ護民官と同じ「テレンティリウス」法案が分裂を引き起こしはじめていた。そこで、あらかじめ時を計っていたかのように、コルビオの要塞がアエクイ人の夜襲によって落ちたという知らせが入った。もしその知らせがなかったら「国内の」分裂は一举に悪化し、「貴族と平民の」感情的対立はいっそう激しく燃え上がったにちがいない (*ulteriusque ventum foret - adeo exarserant animis*)。Liv. 3. 30. 2 (2) 六三。ただし若干訳を変えている。括弧は翻訳者による。]

第三の事例では、周辺部族との数々の戦争の間に挟まれた平穩なつかの間に、些細なことで国内の階級対立が激化した、とされる。ローマで疫病が流行り甚大な被害が生じていたとき、ウォルスキ人、アエクイ人、ウエイイ人らがこの機に乗じてローマに戦争を仕掛けるように誘うが、エトルリアだけは戦争を先送りすることを譲らない。その間ローマでは、平民や護民官たちが、従来貴族に独占されてきた執政官の選挙を阻止し、準執政官の選挙に漕ぎつけるも、結果的にその役職さえも貴族から選出されたことに不満を募らせる。そこでリーウィウスは、貴族と

平民の感情のエネルギーが国外に向かず、双方の階級に向けあう様子を次のように紹介している。

その間ローマでは平民の指導者たちが護民官の屋敷で会合を開き、秘密の相談を重ねていた。彼らは、ここ数年、対外的には平穩無事な間に (*dum foris otium*)、宿願となっているさらなる顕職への道が閉ざされているのはなぜなのか、意見を交わしていた。…平民に罪を着せるのではなく、貴族にこそ科ありと主張する者たちもいた——顕職に至る道が平民に閉ざされているのは、貴族の巧妙な票集めのためである。もし平民が貴族の懇願と恫喝をない交ぜにした選挙運動から逃れることができれば、投票に行くときに自分の階級のことを思い浮かべるであろう。…そのため彼らは護民官を動かし、公職選挙に立とうとする者は白いトガを着てはならぬという選挙運動規制法案を提出することとした。いまからみればきわめて些細なことであり、真剣に議論するに値しないように思えるが、当時はこのことで、貴族と平民のあいだにすさまじいまでの闘争の火蓋が切って落とされたのである (*tunc ingenti certamine patres ac plebem accendit*)。Liv. 4. 25. 9-13 [(2) 二〇六—〇七、ただし若干訳を変えている。括弧は大森による。]

このようにリーウィウスは、外敵の脅威が国内の階級対立を棚上げにする、あるいは逆に外敵との戦争がない時に国内の対立が噴出した⁽³¹⁾、などと記すこともけつして少なくはない。そこには、サルスティウスと同様に、外敵の脅威と国内の一致が相互連結しているかのようなリーウィウスの理解を垣間見ることできる。

リーウィウスの対立的レトリックの場面

また第二に、リーウィウスは、レトリックが行使される演説の機会を、必ずしも調和が成立する場面として描い

ているだけではなく、むしろ対立と不和の中で行われるか、あるいはそれらを招く場面として描いている点でも、サルスティウスと共通しているように見える。リーウィウスが、演説が内紛を引き起こしたと描いている場面を、ここでも『ローマ建國史』の最初の一〇巻の中から、三つだけ挙げておきたい。

第一に、平民の市外退去事件の後に貴族たちの胸中にあつた不満を吐露した元老院議員の演説である。シキニウス⁽³²⁾の提案による聖山への退去がアグリッパの名演説——先ほど引用したローマ市民を体の臓器になぞらえた演説——により解決され護民官が設置された後、退去時の平民の棄農により穀物が不足し食料価格が高騰した。ところがそこに、各地へ人を派遣し穀物の買い付けをした努力もあり、大量の穀物がシキリアから運ばれてくる。そこで元老院は、この穀物をどれだけ平民に分配するべきか議論をはじめるが、先の市外退去事件で味わわれた苦い経験もあり、平民に報復し退去により奪われた権利を取り戻す絶好の機会だと捉え、とくに護民官の特権に敵意を抱いていた元老院議員グナエウス・マルキウス・コリオラーヌスが次のような演説をした、という。

もし平民が以前の食料価格を望むなら、元來の權利を貴族に返還すべきだ。この私がなにゆえ平民ごときの公職者を目にしなければならないのか。なにゆえシキニウスが闊歩するのを見なければならないのか……シキニウスよ、いまこそ市外退去せよ。そして平民を呼び寄せよ。聖山のみならず他の丘にも道は開かれている。穀物ならば三年前に奪つたようにわれわれの畑から奪うがよい。自らの狂気もたらした穀物価格の高騰をよく味わうがよい。ここで私は断言する。この苦難のおかげで彼らは態度を改め、武装して市外退去し耕作を妨げるよりは、自ら畑を耕す道を選ぶだろう。Liv. 2. 34. 7-12 [(1) 一九一—一九二]⁽³²⁾

この演説の後、平民は「激高のあまり暴力に訴える寸前までいった (plebem ira prope armavit)」とされ、護民

官によって彼を裁判の審理にかけ有罪判決が下されることになり、結局、彼を亡命にまで追い込んだ。そして彼はその後、先に引用したように、亡命を受け入れてくれたウェイイ人たちと結託してローマへ侵攻する側に回る（⁵³）ことになり、皮肉にも、彼が引き起こした外敵の脅威がローマ国内の階級対立を解消することになるのだった。

第二に、外敵の脅威が差し迫っているにもかかわらず、それに対処しようとする貴族の提案に不信感を表明する演説の例が挙げられる。護民官ガイウス・テレンティウス・ハルサは、貴族が独占してきた執政官の権限を制限しようと、選定された五人によって執政官権限の制限を定める法を策定するように提案し、貴族はこれに反発したが、ウォルスキ人とアエクイ人が軍の再編成をしているとの知らせをヘルニキ人から受けて、元老院が軍の徴収と両執政官の指揮分担を決める。ところが護民官はこれに反発して、貴族は外敵の脅威をでっち上げることで法案を握りつぶそうとしているのだと、平民に貴族への不信と警戒を説いて、次の通り演説をした、という。

ウォルスキ人が戦争を仕掛けてくるというのは作り話であり、ヘルニキ人はそれに一役買っているにすぎない。いま、ローマ市民の自由が制約が課せられようとしているが、それは正しい理由によるのではない。自由が悪知恵によってもてあそばれようとしているのである。両コンスルは平民に武器を背負わせて急行軍を強い、ローマの外に追い立てようとしている。市民を「いわば」流罪、追放刑に処して、護民官に復讐するつもりなのだ。連中の意図はそれ以外には考えられない。ここで彼らの命令に従うとなれば、われわれの法案は握りつぶされたも同然である。それゆえ事態がはつきりするまで、われわれはローマに留まり、トガを脱がず、町を追い出されぬよう、支配の軛を受けぬよう、警戒しなければならぬ。Liv. 3.10.8-13 (2) 二五—二七。括弧は翻訳者による。」

そしてこのような演説が行われていた中央広場の別の一角では、執政官が徴兵を行っていたところ、そこに護民官たちが駆けつけて「たちまち衝突が起った (*stanim vis coorta*)」とされ、その後も法案に強硬に反対した若手貴族のカエソ・クインクティウスの裁判が続き、国内の階級対立がいつそう激化した経緯が描かれているのである。⁽⁵⁴⁾

第三の場面では、国内の階級対立をむしろ煽って、自己の権勢を高めるために敵対する階級に協力を訴える演説が行われる。元執政官マルクス・マンリウス・カピトリーヌスは、独裁官マルクス・フリウス・カミルスが挙げてきた数々の戦勝と功績に嫉妬して、貴族の身分でありながら平民の守護者であると自らを標榜した。そして彼は、高利に苦しんでいた平民の債務を肩代わりし彼らの歓心を得て、ガリア人から得た戦勝金を横領したとして貴族を非難すると、独裁官によって投獄され、その後平民の反発によって解放されることになった。彼は、このような平民の支持と賛同を背に大胆になって、懲りることなく再び、次のような平民の心情を扇動する苛烈な演説をした、という。

自由のために戦うお前たちは、圧政のために戦う奴らよりも激しく戦うであろうことを、私は疑わないだろう。単に戦う素振りを示してやれ。お前たちは平和を得るだろう。力に訴える用意のあることを奴らに見せてやれ。奴らは権利「だと言いつ張っているもの」を自分から投げ出すだろう。全員が何かをなすべきである。さもなければ、各自があらゆることを甘受せざるをえないのだ……ローマの平民が頭を擡げることができるよう、独裁官職とコーンスル職は完全に廃止されねばならぬ。それ故さあ、私を支えてくれ。借財に関して判決が言い渡されるのを妨げるがよい。私は自分が平民の代弁者（パトロヌス）であることを表明する。私の「平民に対する」心遣いと信義が、この名を私にもたらしただのだ。Liv. 6. 18. 6-15 [(3) 四—四三、括弧は翻訳者による。]

だがマンリウスはこの演説の後、平民のパトロヌスを自称したことで王権を狙ったと受け止められてか、平民の側に立つ護民官たちにも見放され、元老院の同意とともに、王権を得ようとした科で告発され、有罪判決を下され、岩から突き落とされ死刑に処せられた、とされる。⁽⁵⁶⁾

このようなリーウィウスが記述する演説の場面をも視野に入れば、むしろレトリックは、敵味方に憎悪や憤怒を喚起して、国内の階級間対立をいつそう激化させる手段として捉えられているかのように見える。

リーウィウスの多面性——キケローとサッルスティウスの間で

このようにリーウィウスのテキストを検討していくと、彼の「レトリックと共和政との関係」観は、調和的側面と対立的側面との双方が見られ、単純化を許さない複雑で多様な側面をもっていることがわかる。一方でリーウィウスの理解は、ケイパストの議論では、キケローの調和的理解に近似したものとして捉えられている。だが他方でそれは、共和主義者たちのリーウィウス評価の観点から彼のテキストを仔細に検討すると、上記のマルキウスやマンリウスの事例にみられるように、レトリックが共和政に対立と混乱をもたらすとの理解を見せることもあり、むしろサッルスティウスに近似した記述をしている箇所も決して少なくはない。ではリーウィウスの「レトリックと共和政との関係」観は、キケローとサッルスティウスとの両極との間で、どちらの側に位置付けられるのだろうか。確かにリーウィウスは、後世の共和主義者たちが理解したように、サッルスティウスに近い立場に立っていると考えることができる。上記の通り、外敵メトウス・ホステリウスの脅威が国内の階級対立を棚上げにしたとの史実に言及している箇所も多い。ただリーウィウスは、外敵の脅威と国内対立との関係について、サッルスティウス以上に複雑で入り組んだ考えを抱いていたようにも思われる。確かに上記の他にも外敵の脅威によって国内の和合がもたらされたとする場

面も数多く紹介されるが、他方で、対外的な戦争と国内の暴動が同時に起こったとする状況も描写されるし、逆に国内の融和が対外的な平和をもたらしたと記す場合さえある。⁽⁵⁶⁾ リーウィウスの歴史認識では、外敵の脅威と国内の一致との間に、必ずしも単純な相互連結があったわけではないようである。

何よりリーウィウスにおいて、国内の階級間の対立と紛争は、サッルスティウスにおけるように、ローマ共和政に宿命づけられた歴史的事件ではなく、むしろ克服されるべき「害悪」^(マルム)であると捉えられているように思われる。⁽⁵⁹⁾ 三で見たように、サッルスティウスにおいて、それらは建国期以来、貴族と平民との間で断続的に生じ続け、外敵の脅威という歴史的偶然が現れれば一時的に収束するものの、しかし大局的には作為によって克服できない永続的常態にあると捉えられていた。ところがリーウィウスにとって、階級間の対立と紛争は、ローマ共和政を破滅に導きかねない根源的な悪弊であり、レトリックを行使した演説によって除去され、最後には融和に導かれなければならぬ障害として見られているようである。リーウィウスはローマの階級間で起こる抗争や内紛を次のように否定的に捉えている。

ローマ人の勢力は永久的といつてよい。ただしそれは、彼らが互いに争う内紛が起こらないかぎりにおいてである。これこそが唯一の害毒 (unum venenum)、権勢誇る共同体内部に見いだされ、強大な権力を滅びへと向かわせる破滅の種。長い間、ローマはこの害悪 (malum) に耐えてきた。一方では元老院の思慮、一方では平民の忍耐のゆえであった。Liv. 2. 44. 8-9 [(一) 一一三、括弧は大森による。]

こうした党派抗争が原因や発端となって、外敵との戦いや飢饉、疫病、あるいは神々の怒りに原因を求めるほかに最悪の国家的災難のどれよりも、多くの国家を滅亡させてきたし、これからも滅亡させ続けるだろう

(*fuerunt eruntque pluribus populus exitio*)、と言われているのだ。Liv. 4. 9. 3 [(2) 一七二—一七三、ただし訳を若干変えている。括弧は大森による。]

しかも、もし仮にリーウィウスが外敵の脅威が国内の階級対立を抑えるとの歴史認識をもっていたとしても、レトリックがその代替手段であると捉えていたとまでは言えなさそうである。サッルスティウスにとって、レトリックは、外敵の脅威がなくなった瞬間に生じる内紛が暴力の行使を通してローマ共和政に破滅的な損害を与えること、これを避けるために求められる言論の枠組み——外敵の脅威に代わって内紛を常軌化する言論手段——として捉えられていた。ところがリーウィウスにとって、レトリックは、ローマ共和政を破滅に導きかねない「害悪」としての階級間の対立を、外敵の脅威のあるなしに関わらず、調和と融合に導くために常備されなければならない、と捉えられていたようにも思われる。

確かにリーウィウスの著作には、サッルスティウスのように、演説を行う二人の人物の性格を詳述して、両者の性格の対照性を殊更強調し、両者をローマ共和政の維持と繁栄を支える相互補完的な人物として描写するような箇所はあまり見られない。むしろこの点ではケイパストが彫琢したように、演説を行う人物を善き意思の持ち主として描き、その演説が階級間に調和コンコルディアをもたらしするというのがリーウィウスに特徴的に見られる描写スタイルであると言える。サッルスティウスのように暴力による決定的な対立を回避して内紛を常軌化する言論手段としてレトリックを捉える視点は、リーウィウスには希薄である、と言えるだろう。

このように考察してみると、リーウィウスの「レトリックと共和政との関係」観は、サッルスティウスの極ではなく、キケローの極に近づけて理解できそうな気もしてくる。ただしケイパストの主張するように、リーウィウスの理解がキケローとまったく同じ基調にあると考えるのは、やはり一面的であるとの誹りを免れることはできない

だろう。彼は、キケローと同様にローマ共和政に強い愛着があつたと言われているが、とりわけ「共和政とレトリックとの関係」観の点ではやはり異なるところもある。それは彼らの間のローマ共和政の最盛期とその時代に求められたレトリックの役割認識において最もはつきりと表れていると言えよう。二で見たようにキケローは、ローマがカルターゴを征服した後に最盛期を迎え、レトリックは戦争や動乱から解放された自由で平和な時代に最も発展するとの認識を持っていた。すなわちレトリックは共和政における平和の上にさらなる協調をもたらすとされていたのである。しかしリーウィウスは、ローマ共和政の最盛期をキケローよりもむしろ前の時代に求め、共和政初期において、周辺部族との戦争や貴族と平民との間の階級間闘争が最も激しかった時代に、レトリックによる融和の理想的事例——先述のアグリッパ演説が典型的——を挙げている。その意味で、リーウィウスのレトリック理解は、キケローの理解以上に、共和政における不和の上に立つた調和を志向していたと考えられるのである。

このように考察を進めていくと、リーウィウスの「レトリックと共和政との関係」観は、キケローとサッルスティウスとのどちら側にあるともはつきりと言えない、ということになりそうである。せいぜい、両極の間に位置付けておくのが妥当ではないだろうか。当面は、リーウィウスの「レトリックと共和政との関係」観は、キケローの調和的理解とサッルスティウスの対立的理解との中間的な位置にある、ということを一時的な結論としておきたい。⁽⁶¹⁾

一次文献

Cic. amic. — Cicero, *Laelius de amicitia* [キケロー (中務哲郎訳) 「ラエリウス・友情について」『キケロー選集09 哲学Ⅱ』(岩波書店、一九九九年)]

Cic. de or. — Cicero, *de oratore* [キケロー (大西英文訳) 「弁論家について」『キケロー選集07 修辞学Ⅱ』(岩波書店、一九九九年)]

Cic. rep. — Cicero, *de re publica* [キケロー (岡道男訳) 「国家について」『キケロー選集08 哲学Ⅰ』(岩波書店、一九九九年)]

Discorsi — Niccolò Machiavelli, *Discorsi sopra la prima deca di Tito Livio* [マキャヴェッリ (永井三明訳) 『デイスコルシ』永井三明・藤沢道郎・岩倉具忠編『マキャヴェッリ全集Ⅰ』(筑摩書房、一九九九年)]

Liv. — Livius, *ab urbe condita* 「リウィウス『ローマ建国以来の歴史』(京都大学学術出版会、(1)二〇〇八年(2)二〇一六年(3)二〇〇八年(岩谷智訳)(4)二〇一四年(毛利晶訳)・(5)二〇一四年(安井萌訳)(9)二〇一二年(吉村忠典・小池和子訳)」

Sal. Cat. — Sallustius, *bellum Catilinae* [C. サルルスティウス・クリスプス(合阪學・鷺田睦朗訳)『カティリーナの陰謀』(大阪大学出版会、二〇〇八年)]

Sal. hist. — Sallustius, *fragmenta historiarum* (John T. Ramsey (trans.) *Sallust: Fragments of the Histories, Letters to Caesar* (Harvard University Press, 2015))

Sal. Jug. — Sallustius, *bellum Iugurthinum* (J. C. Rolfe (trans.) *Sallust* (Harvard University Press, 1921))

二次文献

Connolly 2007 — Joy Connolly, *The State of Speech: Rhetoric and Political Thought in Ancient Rome* (Princeton University Press)

Connolly 2015 — Joy Connolly, *The Life of Roman Republicanism* (Princeton University Press)

Dryzek 2010 — John S. Dryzek, *Rhetoric in Democracy: A Systemic Appreciation in 38 Political Theory*

Fontana 2003 — Benedetto Fontana, *Sallust and the Politics of Machiavelli in 24 History of Political Thought*

Hobbes 1964 — ホッブズ(水田洋訳)『リヴァイアサン(二)』(岩波書店、一九六四年)

Hobbes 2008 — ホッブズ(本田裕忠訳)『市民論』(京都大学出版会、二〇〇八年)

Kapust 2004 — Daniel J. Kapust, Skinner, Pettit, and Livy: The Conflict of the Orders and the Ambiguity of Republican Liberty in

25 History of Political Thought

Kapust 2011 — Daniel J. Kapust, *Republicanism, Rhetoric and Roman Political Thought: Sallust, Livy and Tacitus* (Cambridge University Press)

Llanque 2005 — Marcus Llanque, *Republican Rhetoric as a Theory of Political Deliberation in 9 Yearbook of Political Thought and Conceptual History*

McCormick 2003 — John McCormick, *Machiavelli against Republicanism: On the Cambridge School's Guicciardian Moments in 31 Political Theory*

Mouffe 1993 — Chantal Mouffe, *The Return of the Political* (Verso) (チャントル・ムフ(千葉真・土井美徳・田中智彦・山田竜作訳)『政治的なものの再興』(日本経済評論社、一九九八年))

- Pettit 1997 — Philip Pettit, *Republicanism: A Theory of Freedom and Government* (Oxford University Press)
- Pettit 2000 — Philip Pettit, *Democracy Electoral and Contestatory* in Ian Shapiro and Stephen Macedo (eds) *Designing Democratic Institutions* (New York University Press)
- Skinner 1981 — Quentin Skinner, *Machiavelli* (Oxford University Press) [クエンティン・スキナー (塚田富治訳) 『マキアヴェッリ — 自由の哲学者』 (未来社, 一九九一年)]
- Syme 1964 — Ronald Syme, *Salust with a New Foreword by Ronald Mellor* (University of California Press)
- Viroli 1998 — Maurizio Viroli, *Machiavelli* (Oxford University Press)
- Viroli 2002 — Maurizio Viroli, *Republicanism* (Hill and Wang)
- Whitefield 1971 — J. H. Whitefield, *Machiavelli's Use of Livy* in T. A. Dorey (ed.), *Livy* (University of Toronto Press)

- (1) ただケイバストはサッルスティウスの「レトリックと共和政との関係」観を論じるにあたつて、ほとんど「カティリーナ戦記」にしか依拠していない。ここでは「ユグルタ戦記」や「歴史」の断片もまた、レトリックの役割を描いた書物であると捉え、ケイバストの観点をこれらの書物にも照射して、サッルスティウスの「レトリックと共和政との関係」観を読解していくたう。
- (2) 「強者が振りまく不正、そこから生じる平民と貴族との離反、その他諸々の不一致は、ローマの始まりから起こっている。」
Sall. hist. 1. 10
- (3) Kapust 2011, p. 49.
- (4) Kapust 2011, p. 30.
- (5) Kapust 2011, p. 49. フォンターナもカルターゴの崩壊後がサッルスティウスにとって「大きな分岐点」であったと述べている。 Fontana 2003, p. 93. cf. 「そしてすべてが二つの党派に分かれ、公共体はこの二つの部分に引き裂かれた」。 Sall. Jug. 41. 5. そして「ローマの難敵カルターゴが根絶やしにされ、全ての海と陸が(ローマに) 開けつつあった時、運命は荒れ狂い、あらゆることを混乱させ始めた」。 Sall. Cat. 10. 1 [四五、ただし訳を若干変えている。]
- (6) Kapust 2011, p. 51.
- (7) Hobbes 1964, 九四頁。
- (8) Hobbes 2008, 二四三頁。ただし訳語を一部変えている。
- (9) ホッブズがレトリックを言葉によって内戦をもたらし政治秩序を危険に晒す点で非難していたことについて、Llanque 2005,

p.32を参照。

- (10) Kapust 2011, pp.50-51.
- (11) Kapust 2011, pp.53-55.
- (12) ただしサッルスティウスは、カエサル対カトーの弁論対決とは対照的に、キケロー対カティリーナの対決について、キケローは「カティリーナの目の前のためか、怒りに駆られてか」^{レズ・リカ}「国家に奉仕する立派な演説を行ったのに対し、カティリーナはキケローの出自への誹謗を加えることによって、「皆を騒がせて、敵や反逆者と叫ばせ」、「私の怒りの火を破壊によって消そうと述べた」としている。Sal Cat. 31. 5-9 (七六―七七)。そしてこの演説のやり取りから帰結したのは和解ではなく決裂であった。
- (13) カエサルとカトーとを補完的な関係として捉える発想は、ロナルド・サイム (Ronald Syme) のサッルスティウス解釈に由来すると考えられる。「カエサルとカトーは行為、諸原理、献身において異なっていた。だが彼らの性格は正反対というよりも補完的であると捉えられることができる。二人は献身という点でローマを救済するために必要とされるものを備えていた。この歴史家が優しく示唆しているのは、そういうことなのかもしれない」。Syme 1964, p.120. Cf. Kapust 2011, p.75.
- (14) Kapust 2011, pp.74-77.
- (15) サイムは、自分が新人であって誰も自分の功績を称賛しないと主張するこのマリウスの演説は「明らかにカトー流の演説 (patently a Catonian speech)」であると述べている。Syme 1964, pp.168-9. カエサルとカトーとの関係をマリウスとスッラとの関係に置き換える見方は、明言されていないが、サッルスティウス自身にもあったかもしれない。
- (16) Sal. Jug. 86. 2-87. 3
- (17) ショイ・コンノリー (Joy Connolly) は、このスッラの演説の中に政治的経験の偶然性 (contingency) の働きを読んでいる。Connolly 2015, p.108. だがむしろこの記述の中に読めるのは、あたかも必然がボックス王の現在の境遇を導いたかのように悟らせるスッラの説得術の巧みさであって、そのような説得力をレトリックに持たせようとするサッルスティウスの意図であるように思われる。
- (18) Sal. Jug. 109. 4
- (19) Sal. Jug. 63. 2-3
- (20) Sal. Jug. 95. 2-4
- (21) 彼らは、現代のデモクラシー論者が主張する対抗者 (adversary) の関係にあると捉えることができるかもしれない。ラディカル・デモクラシーの代表的論者として知られているシャントール・ムフ (Chantal Mouffe) は、「政治共同体内部において異なる

る意見に立つ人たちを、破壊されるべき敵対者^{エネミ}としてではなく、多元的民主社会の秩序において寛容されるべき対抗者^{アドヴァンサリ}として捉えることを提唱している。Mouffe 1993, 八頁。もちろんムフの議論は、現代の自由民主的社会的存在やリベラルなルールの共有を前提にしている点では、サッルスティウスが置かれた時代とは背景や文脈が異なっていることに注意するべきである。なおムフの共和主義に対する態度はやや両義的で、彼女は、古典的共和主義は自由主義に対抗する言説としては「不十分」であるとしながらも (ibid. 四一頁)、マキャヴェッリを導き手にして古典的共和主義の伝統を回復手段とすることが重要であるとも述べている (ibid. 七四頁)。

(22) Kapust 2011, p.77.

(23) フォンターナも、サッルスティウスは、暴力や破壊に至りかねない政治的闘争を、演説や法廷の枠内で表現・昇華させることで、うまく制限し軌道に乗せられると考えたのであり、さらにこの彼の思想が後にマキャヴェッリの教訓になった、と述べている。Fontana 2003, p.101.

(24) ただ『カティリーナ戦役』におけるカティリーナの演説は、彼の下に集まった徒党に向けて、自分たちの窮状と富裕者たちの裕福を対比的に誇張して、むしろ対立と不和を煽る結果をもたらした。Sal. Cat. 20, 2-17 (六一—六三)。もともとサッルスティウスは、カティリーナを荒廃した精神の持ち主と評していたことから、彼を弁論の理想的モデルとしていたとは考えにくく。Cf. Sal. Cat. 15, 1-5 (五十一—五十二)。

(25) Kapust 2011, p.80.

(26) 熟議民主政論者のジョン・ドライゼク (John S. Dryzek) は、ロバート・パットナム (Robert Putnam) が社会関係資本を論じる際に用いた区別に基づいて、結束レトリック (bonding rhetoric) と架橋レトリック (bridging rhetoric) という対照的な観念を提示しているが、後者は多様な(場合によっては対立さえする)状況にある当事者たちの互酬的関係を生み出そうとする点で、サッルスティウスのレトリック理解に当てはまるかもしれない。Dryzek 2010, pp.328-30.

(27) 「キケローは、弁論はとくに自由な政治共同体において文明と共に成長し、平和な共同体において最も開花する。雄弁はとくに敵を征服した後でローマに開花した」。Kapust 2011, p.37, cf. ibid. pp.42, 51.

(28) 「キケローにとって、平和は雄弁とその指導的役割に場を与える良いものであるならば、サッルスティウスにはその逆のことが当てはまるように見える。」Kapust 2011, p.47.

(29) コノリーは、独自のサッルスティウス解釈——とくに彼女の『ユゲルタ戦記』の解釈——を提示している。彼女の読解では、幾つかのポイントに分けて整理すれば、一、身体への着目による政治経験の生々しさを現象学的に伝えていること、二、結論をあえて出さないことによって読者の批判を開いていること、三、賄賂の着目によって経済的不平等とその帰結である政

治的階級差を批判していること、四、貴族を非難し平民を是認してローマ人民の一体感を提示しようとしていること、五、偶然性の働きを観察していること、などが挙げられている。Connolly 2015, pp.65-113。彼女の読解がケイパストらの理解とどのように異なるかについては検討を要するが、『カティリーナ戦記』におけるカティリーナの演説に関する限り、彼女はサッルスティウスのレトリック観を階級間の架橋としてよりも、階級間の経済的格差への批判という観点から捉えているようである。Ibid., p.105。

- (30) Kapust 2011, p.97。他にもリーウィウスは、第二代王ヌマが宗教的行事に力を入れるようになった後、人心と周辺諸国に生じた善き意思の影響について述べている。「彼の最大の功績はその統治の期間中、自らの王位を守るのではなく、平和を守ることに専念したことである。」Liv. 1.21.1-5（一）五二）

- (31) このケケローの記述は、各部門の調和のうちに正義を見出したプラトーンの『国家』を意識したものであるようにも思われるが、ケイバストは、リーウィウスの調和観はむしろアリストテレースの政治的友愛の観念に近いと解釈している。Kapust 2011, pp.83-84。

- (32) Kapust 2011, p.108。

- (33) Kapust 2011, pp.103-07。

- (34) Kapust 2011, p.101。

- (35) ケイバストは別の論考で、このメネニウスの弁論は、初期ローマ共和政において貴族が平民を庇護するというパターンナリズムの関係があったことを表す一例だとしており、共和政の自由が平民による直接的政治参加や自己統治を意味するのではなく、そのようなパターンナリスティックな不均衡の関係を前提にしていた、と論じている。Kapust 2004, pp.397-98。

- (36) コノリーは、このアグリッパの逸話は、スラヴォイ・ジジエク (Slavoj Žižek) の批判に反して、リーウィウスの見解を示すものではないとしている。Connolly 2015, p.63。だが彼女のこの解釈はその根拠を示していない上に、彼女の一般的な見解においても、リーウィウスと、ケケローやサッルスティウスやタキトゥスとの相違が示されており、彼らを一括りにしてローマ著作家たちがレトリックを一樣に捉えているかのように扱っている点で、本稿の立場からは受け入れがたい。とくに自由 (libertas) の理解に「こころ」 Connolly 2007, pp.159, 188などを参照。

- (37) Kapust 2011, p.110。

- (38) Kapust 2011, p.95。

- (39) 「外敵への脅威は、確かにリーウィウスの『ローマ建国史』によくみられるテーマではあるが、序文においてローマ衰退の原因として言及されていない。サッルスティウスが主張する衰退（『カティリーナ戦記』『ユグルタ戦記』において）は、驚く

ほど唐突 (strikingly abrupt) であり、ローマ衰退の原因は外敵の脅威が取り去られることに求められる。この過程はリーウィウスにとって、サッルスティウスにとってよりも、漸次的 (gradual) である。」Kapust 2011, p.91.

(40) 「サッルスティウスの道徳的秩序は集合的恐怖の存在によって左右されていたが、リーウィウスの共和政の道徳的秩序は模範的な有徳の指導者と観察する市民たちとの間で達成される均衡状態であったのだ。」Kapust 2011, p.109.

(41) ホワイトフィールド (J. H. Whitefield) によれば、マキャヴェッリに対するリーウィウスの影響は、よく知られた『デイスコルシ』だけではなく、『君主論』『戦争の技術』『フィレンツェ史』などにも貫かれてゐる、と云ふ。Whitefield 1971, pp.73-96.

(42) 「そしてサッルスティウスがその著書のなかで、カエサルに語らせている以下の言葉がまさに的を射たものであることも、理解できるようになる。『どんな悪い実例とされているものでも、それがはじめられたそもそものきっかけは立派なものだった』。Discorsi, I, 46. (一二六)

(43) マキャヴェッリのローマ史の対立的解釈は、リーウィウスではなく、むしろサッルスティウスに由来するという解釈もある。フォンターナは、『ユグルタ戦記』における上述のマリウス演説に見られるような、サッルスティウスの「支配したい貴族」と「支配されたくない平民」との対比が、マキャヴェッリの著作群に様々な仕方で影響を与えたことを指摘している。「マキャヴェッリは、サッルスティウスの派閥的・党派の闘争への批判を認めて借用し、統一、秩序、公共善へ自己犠牲を強調する伝統的なキケロー的解釈とは全く異なる、ローマ共和制のラディカルで革新的な解釈を示そうとしている」(Fontana 2003, p.100.

(44) Kapust 2011, pp.82-83. しかしケイバストがこのマキャヴェッリの解釈を、ジョン・マッコーミック (John McCormick) に依拠して展開している点もさらに疑問である。マッコーミックは、ケイバストの理解に反して、むしろマキャヴェッリがエリート貴族の支配に抗して民衆の地位を高めようとする立場に立っていたと解釈しているからである。マッコーミックのマキャヴェッリ解釈に見られるのは、ローマ内部の階級間の紛争と対立ではなく、むしろ均衡と調和ではなかったか。cf. McCormick 2003, p.631. ケイバストが自身のリーウィウスの調和的解釈を際立たせるためにマキャヴェッリの対立的解釈と対比するのは、それはそれで彼自身の意図として理解できないが、しかしその対比先のマキャヴェッリ解釈をマッコーミックに帰しているのは奇異に思われる。

(45) Viroli 1998, p.126 (傍点は著者による)。

(46) ペティットは、異議申し立ての民主政は、複数競合する民主政解釈の中の一つであるに止まらず、人々の選好を与件視しその集計をもって公的決定とする民主政観を補完するものだと捉えている。彼によれば、民主政の観念には「共通の是認可能な利益」の実現を政府に求める積極的側面とその利益を阻害する諸要因を排除する消極的側面の二つがあるが、ここから前者を

実現する選挙制度と、後者を補完的に実現する異議申し立ての制度が導かれる、とされる。それは比喩的に言えば、新聞メディアの編集のように、事前の編集方針に沿った「手続的」制度、記事掲載前に編集者の忠告が聴ける「事前相談的」制度、記事に問題があれば訴えられる「上訴的」制度などが考えられる、と。Petit 2000, pp.105-23.

(47) Petit 1997, p.185.

(48) Viroli 2002, p.54 (傍点は著者による)。

(49) ところがケイバストは、現代の共和主義者たちがリーウィウスの記したローマの自由を的確に理解していない、と批判する。ケイバストによれば、彼らのうち、たとえばクエンティン・スキナー (Quentin Skinner) は共和主義の自由を平民の政治参加を含むものとして理解するが、ペティットは参加を含まないものとして理解している。ところがリーウィウスが描く共和初期のローマの自由は、護民官による、貴族からの平民の利益の保護というパターナリズムを含んでおり、貴族と平民との政治的立場の不平等を前提にしていた。その意味で、リーウィウスの描く自由とペティットの共和主義的自由観は少なくとも両立はするが、スキナーのネオ・ローマ的自由観はまったく両立しない、と。Kapust 2004, pp.377-401. Cf Skinner 1981, Pettit 1997.

(50) 農地法改革をめぐる階級間の軋轢が先鋭化する中、執政官クイントクス・ファビウスが戦利品をすべて国庫収入とし、さらに同族のファビウスが執政官となったことに平民が態度を硬化させて外敵の攻撃を招くことになった。だが「こうして戦争によって市民の不和は一時棚上げとなった (Bello deinde civiles discordiae intermisae)。(同年の執政官ルーキウス・アエミリウスの指揮のもと、貴族と平民は一致団結し、再選を挑んできたウォルスキ人とアエクイ人を、首尾よく撃退した」Liv. 2.42.3 (一) 一〇七、括弧は大森による。

(51) ウェイイ人との休戦が認められると、農地法改革をめぐる階級間の軋轢が噴出した。「対外的な平和はたちまち国内の不和に結びつく (Paci externae confesim continuatur discordia domi)」。平民たちは、護民官たちのふりかざす農地法に煽られて、我を忘れる」Liv. 2.54.2 (一) 一二三、括弧は大森による。

(52) なおリーウィウスは、このコロオラスの演説の箇所について、「貴族は、護民官職権のみならず、不本意ながら受け入れざるを得なかった平民の諸権利を返上させることも可能であったと思われる。だが、たとえ可能であったとしても、実際にそうすべきであったとは軽々には言い切れない」と珍しく自身の主観的な判断を加えている。Liv. 2.34.12 (一) 一九二—一九三、注記を参照。

(53) Liv. 2.35.1-39.8 (一) 一九二—二〇〇

(54) Liv. 3.11.1-13.10 (二) 二七—三三

(55) この顛末についてリーウィウスは、「自由な国家に生まれなければ記憶に値した人物は、こうした最期を遂げた。彼からの危険が完全になくなったあと、国民はすぐにその功績だけを思い出し、彼に対する追慕の念をつのらせた」として、平民側の受け止め方を紹介している。Liv. 6.20.14-15 (3) 四七。このような記述からリーウィウスがマンリウスに対してどこまで個人的に共感を持っていたかは定かではないが、このマンリウス演説が平民を扇動し階級対立を煽ることで、彼の自滅を導く結果に至ったとの認識は持っていたように思われる。

(56) 「しばしの平和があった。しかしそれは、例によって、貴族と平民の闘争で騒然とする平和であった。年の始めに政治的不和が広がり、外敵との戦争によってそれが下火となった (*sedtiosa initia, bello deinde externo tranquilla*)」Liv. 2.64.1-2 (一) 二四七。括弧は大森による。)、プラエネステ人の軍が市壁にまで迫ってくると、平民たちは「暴動をやめて戦争に取り組む」Liv. 6.28.3 (3) 六三。ティブル人の到来が「ローマ人に幸いし、すでに父たちと平民の間で生じていた諍いがかくも間近な戦争に対する恐れから押さへ込まれたのは、確かだった」Liv. 7.12.4 (6) 一一〇。

(57) 「国外では危険な戦争が、国内ではより危険な暴動がおこった」Liv. 6.11.1 (3) 二八。「外患が内紛を制するにはほど遠く、逆に護民官が振るう権力はいつそう激しさを増した」Liv. 6.31.4 (3) 六八。

(58) 「ローマ建国以来三百年目にしてはじめて准コンスルがその職務に就いた。アウルス・センプロニウス・アトラティヌス、ルーキウス・アティリウス、ティトゥス・クロエリウスの三名である。彼らがその役職にあるあいだは、国内の宥和が保たれ、それがさらに国外の平和をもたらした」Liv. 4.7.1 (2) 一六八。

(59) 先述の通りケイバストの理解では、キケローはリーウィウスと同じく調和を尊ぶ側に位置付けられるが、実際のところキケローも、対立そのものがローマの悪弊の根源であるとの認識を持っていなかった可能性がある。彼は「弁論家について」において、マルクス・アントーニウスの口を借りて「騒乱というものは常に弊害の多いものであるが、正当であり、必要やむをえないとも言える騒乱も少なからずあったのだ」として、王の追放や護民官の創設など「騒乱が我が国の安寧に寄与する」場合があったことを語らせている。Cic. de or. 2.199 (1111-1113)。

(60) リーウィウスの歴史観には、ローマの習律 (*mores*) が高い水準にあったのは、彼の同時代に比較して、共和政初期であったとの認識があるようである。彼は彼の同時代の習律の水準の低さをしばしば嘆き、「このときの市民が全体として示した中庸、公正、気高さを、いまの時代に、持ち合わせている者が一人でもいるだろうか」(Liv. 4.6.12 (2) 一六七—七八)として共和政初期の水準を称賛している。また執政官ルーキウス・パピリウス・クルソルをアレクサンデル大王に比肩する將軍だとして「当時ほど勇敢な人々に満ちあふれていた時代は、疑いなく他にはないのだが、その当時にあっても、ローマ国家が「彼にも」増して頼りにしていた人物は、一人としていなかった」Liv. 9.16.19 (4) 七三。傍点は大森、括弧は翻訳者による。

とも述べている。

(61) ケイバストが「レトリックと共和政との関係」をめぐるリーウィウスとサッルスティウスそれぞれの理解をやや誇張して対照的に捉えているのは、彼の主著 (Kapust 2011) が、キケローの考察に章を割かず、彼を主たる検討対象から外していることに起因しているように思われる。むしろレーマーらの議論をも踏まえて、さらに考察対象を広げてローマの思想家・歴史家たちの著作を検討すれば、リーウィウスのレトリック理解の多面性はいつそう際立ってくるように思われる。

またもう一つケイバストの議論に不満を感じるのには、彼のリーウィウス解釈の対象が『ローマ建国史』の最初の十巻に偏っている点である。彼の引用箇所を参照すると、とくに序文・一卷・二巻からの引用が圧倒的に多い。リーウィウスにとつてローマ最盛期はどうもこれらの巻で扱われる王政から移行した後の共和政初期にあつたようなので、この時期に彼のレトリック理解を求めるのは概ね間違いとは言えないが、現存する二巻以降の著述を対象にすれば、またそれと異なるリーウィウスのレトリック理解が見えてくるかもしれない。本稿では扱うことはできなかったが、今後の課題としたい。

(付記) 本稿は、平成二九年日本学術振興会科学研究費補助金による研究成果の一部である。